

スピノザ『エチカ』における「関係」としての個体

ゲルーによる「周囲の圧力」解釈をめぐる

立花達也(大阪大学)

本発表では、スピノザが「個体 *individuum*」をどのように理解していたのかを、先行研究の批判を通じて明らかにしたい。スピノザは主著『エチカ』のなかで、複合物体はどのように組織されているのか、それはどのように他のものから触発され、どのような場合には同一性を保つのか、等々を説明するための箇所を設けている。それが第二部定理 13 備考のあとから定理 14 までのあいだに挿入された一連の公理、補助定理、個体の定義、要請である。この箇所は研究者によって「物体の小論」や「小物理学」などと様々に呼称され、様々に解釈されてきた。本発表にとって争点になるのは以下の二点である。第一に、物体の小論において用いられる“ratio”なる概念をどのようなものとして理解すべきかという点であり、第二に、個体の定義そのものをどのように理解すべきかという点である。

まず、物体の小論に見られる「運動と静止の ratio」という語の理解をめぐる、これまでの研究では大きく分けて二通りの解釈が争われている。すなわち、この“ratio”は、(邦訳でしばしば見られるように)「割合」と訳されるべきであるような、物理量を前提とした純粋に力学的な意味をもつのか。それとも、「関係」や「パターン」などと訳されるべきであるような、より厳密でないような意味をもつのか、という対立である (Garrett 1991, Adler 1996)。この「運動と静止の ratio」は、個体がそれによって規定される重要概念であるために、この対立はスピノザ的な個体をどのように理解すべきかという点にかかわる。

これに関しては近年、この“ratio”という用語を、なんらかの「比率」としてではなく、ある「関係」としてみなす解釈が数多く提示されている (例えば Adler 1996, Andrault 2014, 秋保 2018 など)。これは先の対立に照らせば、後者の立場に属する解釈である。この解釈にしたがえば、スピノザ的な個体とはその諸部分のあいだにある一定の「関係」が保持される限りにおいて、その同一性が認められるような個体だということになる。このような解釈を、本発表では「関係説」と呼ぶこととする。発表者もまた、様々な理由からこの関係説にコミットする。

つぎに、個体の定義 (第二部定理 13 公理 3 のあとの定義) そのものの理解については、一般的にはゲルーの解釈が広く受け入れられてきた。彼によれば、個体を組織する諸物体はその周囲の外的物体から包囲され、それらからの圧力を受けることによって個体となるとされる (Gueroult 1974)。ところが、この解釈に対しては、セヴェラックという研究者によって異論が提出されている (Sévérac 2011)。彼によれば、個体を組織する諸物体が互いに包囲され、互いに圧迫されあうことによって個体は形成されると言う (「周囲の圧力」解釈とその批判についてはすでに立花 (2015) で検討している)。セヴェラックの解釈にはいくつかの長所が見られ

るものの、それほど真剣に検討されていないというのが実状だと思われる。

だが、「関係説」が注目され始めている現在の研究状況のなかで、スピノザの個体概念を理解する際にしばしば持ち出されるゲルーの解釈もまた、見直される必要があるのではないか。本発表では、まず「関係説」の妥当性を改めて論じたうえで、この説がゲルーの「周囲の圧力」解釈と整合しないということを示したい。この議論が正しければ、ゲルーの解釈は支持されえないことになり、スピノザの個体概念はゲルーとは異なる見方によって理解されなければならないということになるだろう。主にこの点为本発表の重要なポイントとなる。このことを確かめたくて発表者は、セヴェラックによる異論をも「関係説」の観点から批判的に検討する。そして、その問題点を改良したヴァージョンを、採用すべき個体概念の理解として提示することを試みる。

主な参考文献

- Adler, Jacob, “Spinoza’s Physical Philosophy,” in *Archiv für Geschichte der Philosophie*, 78, pp. 253-76, 1996.
- Andrault, Raphaële, *La vie selon la raison : physiologie et métaphysique chez Spinoza et Leibniz*, Paris, Honoré Champion, 2014.
- Garrett, Don, “Spinoza’s theory of Metaphysical Individuation,” in Gracia, J. and Barber, K. (ed.) *Individuation in Early Modern Philosophy*, State University of New York Press. pp.71-101, 1994.
- Gueroult, Martial, *Spinoza II – L’âme*, Paris, Aubier-Montaigne, 1974.
- Sévérac, Pascal, *Spinoza. union et désunion*, Paris, Vrin, 2011.
- 立花達也「スピノザ『エチカ』における個体論の意義——第二部自然学的付論の読解——」『哲学の探求』, 第 42 号, 哲学若手研究者フォーラム, pp. 238-255. 2015.
- 秋保亘「スピノザ『エチカ』「物体の小論」における身体論の射程—「個体」と「形相」の概念を中心に」『哲学』, 第 69 号, 日本哲学会, pp. 125-139, 2018.